

## リハビリテーション病院さらしなに中華人民共和国から視察団



6月27日(水)北京の中日友好医院の医師を中心とし病院経営者や中国政府関係者を含む23名の方々が中国国内での回復期リハビリテーション病院の導入準備のため、当院を参考にしたとのことでした。さらしな側は鷹野院長、伊藤室長、神谷部長ほか、各階師長とリハから大瀬室長らが出席し対応、施設見学の後、熱のこもった質疑応答が行われました。

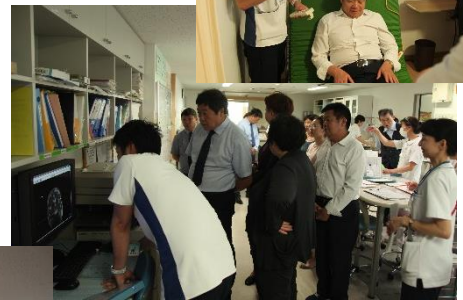


鷹野院長と郭丹(かくたん)先生

今回の視察で通訳を務められていた中日友好医院の郭丹先生は、鷹野院長が30年前に中国でリハビリテーションの講習を行った際の一期生のお一人。旧交を温められた後、流ちょうな日本語で通訳をこなしていらっしゃいました。



視察は1階から上に行く班と、屋上から下へ行く班の二班に分かれ、リハ室、スタッフステーション、病室などをご案内・説明しました。



質疑応答では「夜間の人員配置」「家族の姿が見えないこと」「入院患者一人当たりの収益」など多岐にわたる質問に鷹野院長や神谷部長をはじめとしたスタッフが答えました。

予定時間を1時間以上オーバーした熱気あふれる視察の後、中国のみなさんは本日の宿泊地である山梨へ向かわれました。

中日友好医院（中国では「医院」は規模の大きな総合医療機関を指す。）日本政府の無償のODAにより165億円の費用で北京市に建設された。中華人民共和国衛生部の直属で、1984年10月23日に開院、ベッド数1,610。